

いきいき山梨ねんりんピック2025

山梨県シルバー俳句大会 入選作品集



◆展示期間 令和7年6月13日（金）～6月15日（日）

◆会場 山梨県立図書館1階「イベントスペース」

社会福祉法人 山梨県社会福祉協議会

井上康明選

■特選■

冠雪の一片を剥ぎ南風吹く

富士吉田市 小俣 紀子 八四歳

月おぼろ湾へ迫り出す露天風呂

富士吉田市 小林 祥子 八二歳

春の日の樹液かがよふ葡萄蔓

山梨市 的場 けさみ 六九歳

春一番風に身を寄すウォーキング

大月市 小林 久子 八四歳

甲斐駒の壁垂直に冬ざるる

甲府市 河野 一郎 七一歳

■秀作■

雪螢富士より暮るる御師の町

西桂町 新田 宏子 八〇歳

リハビリは先づ歩く事迎春花

大月市 斧田 登美子 七三歳

極寒にオリブオイル白濁す

北杜市 中山 久美子 七〇歳

連山に雲なきひと日春動く

北杜市 小山 崇 八一歳

みちのくの残りの花や五大堂

北杜市 伊藤 政雄 八四歳

夏雲や田水あふれて道濡らす

北杜市 松林 新一 九四歳

秋晴れや山弁当にゆでたまご

西桂町 梶原 とき子 八四歳

逆光の海へ揺るるや水仙花

大月市 秋山 多美子 九二歳

老いと言ふ未知への一步去年今年

都留市 渡辺 孝行 八五歳

父の座に父亡き春の炬燵かな

都留市 小笠原 勇 九三歳

【評】

年齢に関係のない若々しい着想の作品に惹かれました。冬から春にかけての風景を大きく捉えています。雪をつけた峰、朧夜の海、春の日の葡萄棚の樹液など季節のなかの手応えある風景を生きた生きと表現しました。老いに向かう心境、リハビリ、孫との情景など暮らしの中から丁寧に詩情ある風景として詠んでいました。

(特選句)

○一句目 峰の頂きの雪が南風によって消えたことを「剥ぎ」と表現しています。独自の個性的な把握を豊かなリズムに溶け込ませています。

○二句目 霞のかかる春の夜の海辺、作者は露天風呂に入って湾と一つになるかのような体験を大きな風景として詠んでいます。

○三句目 春の剪定によって切られた切り口から樹液が落ちている様子を輝かしい春の一場面として描きます。春を称える一句です。

○四句目 その年初めて吹く強い南風とともに歩く姿は若々しい生命力を感じさせます。明るく健やかな春の情景です。

○五句目 厳しい冬の甲斐駒ヶ岳の雪景色を真正面から表現しています。聳え立つ姿の荘厳な印象が鋭く伝わってきます。

保坂敏子選

■特選■

雪螢富士より暮るる御師の町

西桂町 新田 宏子 八〇歳

総取りは妣の思ひ出春隣

葦崎市 河野 節子 七三歳

気紛れに雲もてあそぶ春の風

甲府市 渡辺 優 八八歳

軒を打つ音はしぐれか温め酒

甲州市 秋野 正彰 八三歳

リハビリは先づ歩く事迎春花

大月市 斧田 登美子 七三歳

■秀作■

走馬灯眠れぬ夜の子守歌

甲府市 星 はるみ 六五歳

がさがさと風の生まれて鏡餅

山梨市 宮本 みよ子 七三歳

平凡な二人の暮らし初明り

富士吉田市 加々美 恵子 七一歳

甲斐駒の壁垂直に冬ざるる

甲府市 河野 一郎 七一歳

足早に暮れゆく空や雁の列

北杜市 小林 恵美 七二歳

虫食ひの妣の手袋捨てられず

甲斐市 松田 弘枝 八〇歳

何もせずひと日を過ごす花曇

葦崎市 山本 栄子 七二歳

春立つや農事のメモは追肥から

大月市 鈴木 光子 九〇歳

父の座に父亡き春の炬燵かな

都留市 小笠原 勇 九三歳

連山に雲なきひと日春動く

北杜市 小山 崇 八一歳

【評】

季語は文字通り季節の言葉。季語を使った俳句という文芸はおのずと四季の移り変わりに関心を抱かせてくれます。何かに関心を持つことは、心をドキドキさせることです。このことは心身ともに健康で明るい生活を維持するうえで最も大切なことのように思います。

六十歳以上を対象としたシルバー俳句大会ですから、作品の中に「老い」を詠んだ俳句が多いのは当然のことですが、「老い」を暗く詠まないで明るく詠むことが作品にいのちを与えてくれるように思います。「陰を陽に、陽を陰に」を心に置いて。

(特選句)

○一句目 明けたり、喜れたり、晴れたり、曇ったりという自然現象を、いつも富士を中心に置いて暮らしていることが「富士より暮るる」から想像されます。

○二句目 御師の町は雪螢が舞うころ。どんよりと暮れてゆく富士。紡いだ糸を総(かせ)に巻き取る仕事は冬場の女の仕事でもあったようです。

○三句目 幼いころから母の背中を見て来た作者には、この総取りこそが母の思い出のひとつなのだと。春隣に解放感があります。

○四句目 そよそよとやさしく吹いたり、時には砂を巻き上げたり、春の風は気まぐれです。雲をぼつかりと真綿のように浮かばせるのも、春の風のいたすら

○五句目 ばらばらという音は、風が木の葉を掬ったのだらうか、それとも時雨だ

らうかと。「酒は静かに飲むべかりけり」。そう、温めて。晩秋の夜の静寂

がしみじみと伝わってくる作品です。

○五句目 「先づ歩く事」とリハビリを前向きにとらえています。これなら回復はすぐ

目の前。迎春花は黄梅のことですが、春にさきがけて咲くあの黄色い花の

長田群青選

■特選■

初蝶や青空ヨガの開講日

北杜市 道村典子 七三歳

雪螢富士より暮るる御師の町

西桂町 新田宏子 八〇歳

逆光の土間に母ゐて春深む

都留市 武藤玲子 七二歳

白梅や一人となりし米を研ぐ

中央市 飯塚寿美香 七二歳

春田打八ヶ岳一片の雲止め

北杜市 八代菜美子 七七歳

■秀作■

残業の子に熱々の根深汁

韮崎市 山本栄子 七二歳

春立つや農事のメモは追肥から

大月市 鈴木光子 九〇歳

父の座に父亡き春の炬燵かな

都留市 小笠原勇 九三歳

みちのくの残りの花や五大堂

北杜市 伊藤政雄 八四歳

春寒の枕辺に読む真砂女の句

甲府市 上田美弥子 九一歳

寒行の僧侶の声を風が消す

南アルプス市 安井眞由美 八一歳

雲一つ二つ暮春の太鼓楼

北杜市 細川富士夫 八八歳

老僧の法衣の裾の余寒かな

南アルプス市 小松重和 八八歳

甲斐駒の壁垂直に冬ざるる

甲府市 河野一郎 七十一歳

総取りは妣の思ひ出春隣

韮崎市 河野節子 七三歳

【評】

芭蕉に「舌頭千転」という言葉があります。俳句を作る上で「リズム」を大切にするといいことです。でき上がった作品を、黙読でも音読でもよいので、何度か読んでみて、読みやすいかどうか。どこかつかえるような時には、言葉使いに問題があることが多いと思います。よい作品は、内容とリズムが一体となった時にでき上がります。

(特選句)

○一句目 「青空ヨガ」は戸外でのヨガ教室。その開講日、受講者が集まっている広場に、やや覚えぬ羽使いで蝶が飛んで来た。「アツ初蝶！」明るい語調が陽春の景を暗示する。

○二句目 夏の間、富士講の人達の摂待で賑わっていた御師の町「吉田」も今は冬。暮れ方、綿虫が寒々と舞い、今にも雪になりそう。ドッシリと座った富士山がまず夕闇に沈んだ。

○三句目 昔の農家の土間は暗く、一年中ヒンヤリとしていた。しかし、内と外を結ぶ大事な役割があり、人の心も土間で切り換えられた。この句の「母」もそんな昔の人だろう。

○四句目 当たり前のことだが、夫婦一緒に死ぬわけには行かない。どちらかが先に逝き、どちらかが残る。残された者は生きて行くために食わなければならぬ。「白梅」は生きる意志を象徴する。

○五句目 春の農事は、鋤を使つて一打ち一打ち田を耕すことから始まる。地味で根気のいる作業だ。一服に遠く八ヶ岳を望むと、一片の白雲が浮いて動かない。耕耘機を使う現代の情景としても差し支えない。

■佳作■

山笑う蛇行の大河耀けり

都留市 高部 志づの 九一歳

集まりて大安の日の味噌造り

中央市 田中 法子 九〇歳

家ゆすり山を揺りて春疾風

都留市 前田 智子 八一歳

あたたかややの手にある吾の小指

身延町 片田 駿三 七九歳

クレマチス夫の退職記念日に

都留市 伊藤 佐代子 七四歳

部屋に吊る野良着園服ヒヤシンス

富士吉田市 勝俣 茂 六五歳

昨夜の雨にじむ大地や春立ちぬ

甲府市 松本 宏子 八三歳

一葉の文読む春の文学館

笛吹市 石原 正則 八五歳

電線を渡れる猿や春の雪

富士河口湖町 伊藤 和子 七三歳

海底に眠るピアノや春の月

都留市 板津 松男 七六歳

如月や母子にフリーマーケット

市川三郷町 三枝 稔 七九歳

黄楊垣に鳥語せわしき春隣

富士吉田市 渡辺 久美子 七六歳

ゆつくりと惜春の橋渡りけり

富士吉田市 渡辺 武人 八一歳

猫柳小学唱歌聞こえ来る

甲府市 功刀 佳秋 七〇歳

若緑孫懷妊の知らせあり

西桂町 権守 喜代子 八三歳

風強き日暮れ早まる御酉さま

上野原市 足立 一男 八三歳

寄せ鍋や相打ちとなる箸もあり

甲府市 遠藤 武文 八二歳

落書きに鏡文字ありこどもの日

笛吹市 石倉 正明 七四歳

寝落ちゆく邑さわさわと喜雨来たる

南部町 渡邊 公子 八四歳

早春の風なほ尖る富士裾野

甲府市 渡辺 優 八八歳

秒針の一瞬光る寒暮かな

中央市 長田 廣子 八六歳

昭和百年快晴と記す初日記

富士吉田市 加々美 敦子 七八歳

涼しさや夜明けの音は遙かより

南部町 渡邊 公子 八四歳

開拓の歴史を語る桜かな

葦崎市 樋口 美美子 八〇歳

耳に挟んだ鉛筆さがす日永かな

甲斐市 長谷川 栄子 八五歳

あの海もあの山も見た夏帽子

大月市 山口 美佐子 六七歳

碑の文字の薄れて花馬酔木

山梨市 杉原 万利江 七七歳

星の海渡る聖夜の鐘の音

北杜市 伊藤 政雄 八四歳

落雁の紙に崩るる花曇

都留市 武藤 玲子 七二歳

背の子のしっとり重し桃の花

北杜市 八代 菜美子 七七歳

轆にヴァセリン擦り込む風呂あがり

身延町 切金 美雪 六九歳

若菜摘む背に日ざしのたつぷりと

山梨市 宮本 みよ子 七三歳

青藍の大空に舞ふ長玄坊

北杜市 宮川 久子 八六歳

初明り山脈徐々に徐々に染め

市川三郷町 河西 五十鈴 八七歳

一枚は青き空へと銀杏散る

山梨市 小野 真理子 七〇歳

鍋いっぱい姪から届く白菜よ

富士吉田市 小俣 喜代子 九三歳

初鯉厨に海の匂ひ満つ

北杜市 大柴 節子 九二歳

芦原の風ぬけゆきし獣道

甲斐市 早川 幸子 八〇歳

幼子も手をあわせをり終戦日

甲府市 横山 博美 八一歳

荒海の音を間近に水仙花

南アルプス市 阪本 みつい 八五歳

寺町のんだら坂や実南天

身延町 赤池 一博 七六歳

真つ白な傘遠ざかる青田道

甲斐市 長谷川 栄子 八五歳

一輪の侘助白し利休の忌

甲府市 小宮山 榮子 八二歳

白壁に陽の落ちてゆく福寿草

山梨市 杉原 万利江 七七歳

せせらぎに映る青空啄木忌

甲府市 小林 さち枝 八六歳

※「年齢」は令和七年六月十三日現在です。

(山梨県シルバー俳句大会展示初日)

